

41. 医学生主体の地域包括医療自由プログラムへの参加と内的モチベーションへの影響

¹⁾ 獨協医科大学医学部3年, ²⁾ 医学部1年,

³⁾ 地域医療教育センター

原美沙子¹⁾, 土屋智裕¹⁾, 人見浩亮¹⁾,
谷口有寿佳¹⁾, 鈴木健生²⁾ 下田実果²⁾,
島野浩樹²⁾, 西山 緑³⁾, 田所 望³⁾, 古市照人³⁾

【目的】獨協医科大学医学部には、栃木県地域枠と地域特別枠の学生に必修となっている地域包括医療実習が存在する。しかし、学生の中には、正規の実習枠を超えて、地域医療の知識と経験をさらに得たいという意欲が持っているものがある。そこで、自由プログラムとして学生主体で栃木県内外の医療施設で実習を行い、地域医療に関して学ぶ機会が設けられた。そこで本研究は学生主体の自発的な実習が医学生の内的モチベーションに与える影響を検討することを目的とした。

【方法】地域包括医療自由プログラムの参加者は、2015年8月北海道の利尻島国保中央病院1名、2017年3月福井県の名田庄診療所2名、2017年7月獨協医科大学日光医療センター・三依診療所1名、8月救命救急センター2名、総合周産期母子医療センター4名であった。これら実習生より提出された報告書の中から内的モチベーションに影響した内容を抜粋した。また、この実習への参加意欲についてのアンケートを第1学年から第3学年の栃木県地域枠対象に実施した。

【結果】各病院の実習生の報告書より「医師として必要な資質を垣間見ることができた」「幅広い医学的知識の必要性を痛感し勉学に対する意欲がかき立てられた」「身体だけでなく心をも診ることの重要性を学んだ」「救急医療の現場で医師としてのプロ意識を肌を感じ医学生としての自覚を促された」「新しい命を扱う現場を見学し医師の責任の重さと喜びを知ることができた」等の意見があった。また、栃木県地域枠24名のアンケートの結果、67%が正規のプログラム以外に実習に参加する意欲があることが分かった。

【考察・結論】本研究結果より、自発的に実習に参加することで医学的な知識の取得や豊かな人間性の形成に対する内的モチベーションがさらに上がったことが分かった。

【謝辞】実習にお協力いただいたすべての医療施設の皆様方に感謝申し上げます。

42. ロボットを活用した医学英語教育の可能性の検討

¹⁾ 医学部1年, ²⁾ 基本医学情報教育部門,

³⁾ 基本医学語学・人文教育部門

小田切誠也¹⁾, 松下直樹¹⁾, 柳沼弘樹¹⁾, 坂田信裕²⁾, 坂本洋子³⁾

本研究では、医学部1年生の選択科目である「リベラルスタディ」において実施した「人型ロボット Pepper 医学英語教材の開発入門」の内容を紹介し、医学英語研究の可能性を検討した。

はじめに、どのようなアプリを開発するのか意見を出し合った。既存の医学英語に関するオンライン教材、参考書、教科書を見て比較検討し、「英単語の学習が単調になりやすい」、「発音の違いがよくわからない」などの問題点があげられた。そこで、クイズ形式、発音練習、テーマ別、一年生の基本的な医学英単語、というような条件を設け、英単語学習アプリを作成することにした。アプリ作成は各学生がプログラミングと単語の入力に分かれて手分けして行った。

作成したアプリは(1)メニュー画面、(2)質問解答のフローチャート、(3)選択肢(意味)の順番に作成していった。(1)のメニュー画面は勉強したい領域を選ばせるためのもので、パネルを指で触ることによって学習したいテーマを選ぶ。(2)の質問解答のフローチャートでは、質問、解答、発音の順で正解すると次に進むように専用のソフトを使って作成した。(3)の選択肢ではパネルの画面上に4種類の選択肢を赤、黒、青、緑で色分けし、均等な面積で表示されるように作成した。そして、発音練習という観点から、Pepperの音を判別する機能を利用して、選択問題の解答で正解したときに限り、発音を促すページに進み、解答者が正解の英単語の発音をするという機能を付け加えた。

アプリを一通り作成した後、そのアプリを情報教育研究室的に学生が試行し、改善点などを提案してもらった。提案内容は、「質問の単語を繰り返してほしい」「分からない単語については、スペルが出るとよい」などであった。これらをふまえてアプリを改善した。

このアプリを作成する過程で、英単語に触れる機会が増え、Pepperを使うことで従来の教材では単調になりがちな英単語暗記を楽しく行うことができるといった利点を見出した。

現段階ではロボットを活用した医学英語教育は始まったばかりであり、試行段階であるが、今後はさらに医学部生を対象として、授業や自習で利用する機会を増やし、学生の医学英語教育に生かしていきたいと考える。